

# 豊かな感性を身につけた選手の育成

～世界から日本、日本から滋賀、そして伊吹～

滋賀県 滋賀県立伊吹高等学校

樋 口 修

## 1. はじめに（挨拶・自己紹介：樋口修を知つてもらう）

### (1) ホッケーと私

①指導歴

②ホッケーを知ろう → VTR (DVD)

(2) 人間とは → 不器用 だからこそひたむきにやるしかない～“見栄えよりも中身から”が信条

(3) 選手として運がよかつた（能力以上の成果と経験）

(4) 指導者として

#### 初任となる前任校サッカーチーム

・始業式までに挨拶 … 登録部員数50人以上？

・練習参加は3人，練習は缶蹴りして終わり？

・春季総体後，選手たちからの感謝の思い

選手の思い > 自分の思い → 恥ずかしさと悔しさ

★ ホッケーと距離を意識的に置く

#### 伊吹高校女子部

・H9 何もない（ユニホームの重み），体操，ルーズソックス・6月初遠征，優勝旗返還，少年男子監督（7年ぶり本国体出場）

・H10～13 勝ちきれない…PS負けなど惜敗，ベスト4止まり

・H14 何もないからこそ全国優勝 人（秋は10人），物，金（ない）→発見・工夫，5得点2失点・PS戦で2勝

・H15～ 何で勝つかを模索，初優勝の亡靈？，そうしないと勝てない？  
全国選抜大会…たった1本のシュートで準決勝敗退

・H17～現在 → 何で勝つか 攻めるではなく『攻めきる力』を求めて

(5) 読書好き・遠征や出張時には必ず読書

書物：自分の知識の幅や深みを育て感性を育てることができる → 『孫子』に強く感銘  
伊吹高校は朝のSHR前に8分間の朝読（読書の時間）を行っている

## 2. 指導者としての感性磨き

『感性』とは…“外界の刺激を拾う広さと深さ”（びわこ成蹊スポーツ大学教授 松田 保 氏）

→ 開発レベルが予測能力につながる

感性に富んだ選手（指導者も）は相手よりも一步先に動き出す

◇ H17年ごろ ▽ 何がしたいのか？これでいいのか？もう日本一にはなれないのか？

▽ 飢えた心・焦り・できない自分・不安

▼ でも、何をしていいのかわからない

(1) U-18日本代表コーチへの就任

2005世界ホッケーフェスティ（H17.7）への参戦…自身初の指導者として海外遠征

①オーストラリア → 文字通り 世界の“トップ”チーム

## ◎日本と豪州との比較

	日本	オーストラリア
民族性・人間性	繊細・まじめ・島国根性?他人への干渉過多	おおらかながらもまじめ
ホッケー人口/人口	約12.000人 / 約1億2700万人	約300.000人 / 約2.100万人
文化	学校教育 → 全体主義・没個性への流れ → みんなみんな、自己犠牲?	西洋文化 →個人が大切・ゆったりとした時間の流れ →それぞれが生き・生かし
ホッケー	組織 《細かい》 → 体格差をカバー → 確率の高いプレー	ダイナミック → 個人が有機的に動く組織 → 体格を活かしたパワー&スピード

### ②日本が世界で勝つには

☆ 組織的なホッケー 《走力をベースに》

→ しかし…約束事による組織化・パターン化では限界、勝ちきれない、相手に選択を迫れない、  
スカウティングの餌食

→ よって…個人の判断を生かした組織作り・個人の育成が必要であり先決

☆ 指導者の理念・方針

\*個人を伸ばすため方法を考え選択させて判断を求め、判断を伴うプレーの精度を上げる

\*組織として最大限の力を發揮するために個々の良さを引き出し合うグループ作り・組織作り

### (2) 北京オリンピック日本代表チームGKコーチへの就任

①指導者としての代表チーム：その競技を進化させ、強化する・メジャーにしていく役割と責任

②勝ちたいではだめ、勝たなければならない → アテネでは8位、今回はメダル獲得が目標

☆ 恩師 恩田先生との指導者としての出会い → 徹する強さ

☆ 韓国のスター選手・世界のホッケーを最も知っている柳さんとの出会い

→ 自分自身のホッケー観の共感とスケールアップ

☆自身が指導する選手の活躍 GKとしてホッケー観への一応の自信、守備の組織作りへの手応え

そこで…逆転の発想～相手の攻撃を先に押さえる → 良い守備ができる

= 危険な状況、ウイークポイントを知っている

ならば…危険な状況を作り出す失点のポイントを突くことを考えてさせる

→ 攻撃のイメージの構築

### (3) 野洲高校サッカー部の躍進と衝撃

当時、FCバルセロナのコーチであった村松尚登氏の著書から戦術的ピリオダイゼーション理論に刺激されていた。同時に、日本人の今までのホッケー観を越えたいという思い

その当時のサッカーの主流：スピードとパワー任せ

ところが…

①パスとドリブルを有効に使いながらゴールに進み、相手守備組織を崩していく

②プレッシャーのかかるところやかけられていても平然とプレーする“高校生”

そこで…

☆ サッカースタイルのホッケー化を考える

その当時のホッケーの主流：スピードとパワー任せ

ボールスピードに任せての陣地の取り合い

ゴール前で競らせてボールを入れミスを誘う結果重視

☆ ホッケースタイルの特化、攻撃スタイルのモデル化、そして伊吹化

③その瞬間の状況把握により、ゴールに向かいシュートを決めるなどを第1に優先した判断

④ボールを受ける時点で相手を消す狙いを持つポジショニングとファーストタッチ

→ 戰術の基盤となるコンセプトが明確になった

#### (4) 伏見工業・東福岡高校ラグビー部の哲学

①最初は、友人がA高校（滋賀県の全国出場常連校）監督の時に応援で花園へ出向いたが、

現在は1月5日の準決勝を生徒と観戦

→ 同じ年代の高校生が身体を張って責任感のあるプレーを繰り返す精神力を生徒に感じさせたい

②『東福岡のラグビーをやりきることが日本一になると信じてプレーしている』と聞き、感銘を受ける

→ 相手との勝負の前に自分との闘いがあり、自分に勝ってこそ相手との勝負に勝てる

→ 自分たちのスタイルに自信を持ち、一貫している

#### (5) 慶應義塾大学ホッケー部との関係

①本校卒業生の入学を期にホッケーを媒体とした企業人等など幅広い人々との交流

②自分自身の人生観に大きな影響

→ スポーツが成す国づくり その使命の大きさとスポーツの発展性を痛感

#### (6) 陸上競技（個人種目）から学ぶ

①県高校駅伝へホッケー部の選手が参加し、本校陸上部顧問より陸上競技の楽しみ方を教わる

「1つは大会で勝利すること、もう1つは自己新記録を達成していくこと」

→ “相手に勝つ前に自分に勝つこと”という言葉を理解できた

→ ホッケーは集団競技ながらも個人の集まり・・・ならば個人にスポットを当てたとき当てはまる

### 3. 強化方針の明確化

#### (1) 伊吹は？ライバルは？ → 伊吹の長所と短所・ライバルの長所と短所？

①H17年度ごろまで

自分とは？相手とは？何が良くて何に差があるのか？

→ 恥ずかしながら… 模索しながらも漠然としていた

②強化についての中途半端な回答に恩師から激昂される

『どうやって勝つんや？そんな回答で勝てるンか？』

『そんな回答で保護者は納得するンか』・・私も痛かったが恩師の心はもっと痛かったと思う

③比叡山高校バトミントン部監督（何度も日本一を経験）

湖北の子たちは北陸の子達の気質に似ている。大人しいリーダーにはついて行く

逆説的に考えると・・リーダーがいないと動かない・動けない

『 孫子 』 彼ヲ知リ己ヲ知レバ、百戦シテ殆ウカラズ

[敵を知り己を知った上で戦えば絶対に負ける気遣いはない]

己を知って敵を知らなければ勝率は五分五分…と続いている

\*最近は逆に相手ばかり意識していることが多いのでは？

→ 自分達のスタイルを貫く力 木鷲 不安？

= 相手と戦う前に自分と戦うことが大切、その後に相手のことが出てくる

### ◎伊吹とライバルチーム

	滋賀	A	B
地域性	まじめ、堅い、協調していく 人の目を気にする一歩引く、 待つ、周囲を見てから動き出す	パワフル 狙ってる（笑いも） だんじりパワー？	自分が先 とにかく急ぐ 競争
ホッケー	少人数 堅守速攻	中高一貫での体制が確立 個人技	大人数 確率を求めるホッケー
チーム文化	まじめ・堅い・助け合い	相手のミスをのがさない	競争

### (2) 強化方針 【 競技力と地域性の融合=世界で戦う選手を伊吹ならではの方法で育成する 】

① 国際ゲームで活躍する選手の育成 → “One One”，一人一人の個性を伸ばすか

② ホッケースタイルの特化、攻撃スタイルのモデル化、そして伊吹化

#### ◆ ホッケースタイルの特化

× ミスを誘う確率のホッケー 相手のレベルが高ければ通じない

○ 相手を消してゴールに進む この進化から世界で戦う→相手との“ズレ”を武器にして戦う

#### ◆攻撃スタイルのモデル化

ファーストタッチに入る前のアイデア すでに相手とズレができている

ファーストタッチのアイデア 仕掛けでズレを活かす、創る=相手を消す、相手守備組織を崩す

#### ※ “ズレ” とは？

=相手の狙い（アプローチ）に対して入れ違いを作るための動き・ポジショニング・プレー  
によって創り出した時間的・空間的余裕

#### ◆伊吹化 まじめさを活かしたルーティーンの徹底

他者理解におけるそれぞれの関わりの深さから湧き出る温かいチーム作り

### (3) 具体的な強化方針 【 伊吹として → 伊吹化 】

#### ①チーム理念

※自分の力を100%出し切る

※自分の中に2つのモノサシをもつ

・自分自身の能力に対してのモノサシ → 今の自分に挑戦できたか、上手ならいいのか？

・自分自身と他者を比較するモノサシ → 自己満足になっていないか、井の中の蛙？

#### ②人間性 《 まじめさ 》 をより強く、引き出す 『 自分に厳しく、人に優しく 』

※ 〇〇のため…? 人のため人のため=“偽”

※人に喜んで貰えることや、喜んで貰えたときの顔を見て自分が喜べる自分を作る

・真の優しさの源 【母親】

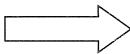
・他者の喜び = 自分の喜び → 強さ = チームの柱→徹底する力

これこそ “One for all, All for one” のでは

★決してチームのために自己犠牲を払うことではない

★してもらえた (=感謝) → 何で返すのか? 電車での移動・チームでの役割分担  
③競技力 主導権を握る 《 まじめさ 》 を生かす

継続して力を出し続けるための  
スピード、スタミナは重要



それ以上にそれを支え続ける  
【心のスタミナ】は必要不可欠

#### A 守備 : 約束事と優先順位の徹底

- ・がんばれば 50 : 50 のレベルを持って行け、続ければ形勢逆転の布石になる
- ・スコアレスならば守備的なチームが主導権を握れ、チームとしての一体感・信頼感の増幅

**ターンオーバー** (攻守の切り替え)

**HELP** <守備 → 攻撃>

ボールホルダーへのチャレンジに対してのカバーリング

=ターンオーバーの起点 → マジックパス

<攻撃 → 守備にならないように>

ボールホルダーのプレーしやすいサポートアングル

#### B 攻撃 : 常に仕掛け続ける = 繰り返しチャレンジし続ける

- ・攻撃には変化が必要 → 相手の逆をつく

★ パターンで行うのではなく判断を生かすためのルーティーンの徹底= まじめさを活かす

### 4. 今後、指導者 [私] に必要な能力と意識

#### (1) 指導者の理念・方向性

##### ①個人を伸ばすための指導者の力量UP

※その選手の何を見つめ、何がストロングポイントか? そのストロングポイントを伸ばすキーは何なのかを見つける

※その選手の人間性をどのように刺激して変化させていくことが成長につながるのかを見つける  
→ 些細な仕草や雰囲気を見逃さない、上級生やリーダーと話していくことで情報を得る

※個々の選手との心の深いところでの結びつきをつくり信頼関係と成長の鍵を見つけ創り出す

→ 日誌などは普段はつけないが休み時間や廊下、迎え待ちの時間などに個人的に話し、聞く

※苦しいときや窮地に立たされたときほど習慣化されているものがでることをふまえて練習する  
→ 練習や試合の設定を明確にする = 何をそのときに成長させるのか

☆ 苦しいところで出てくる状況が習慣化された本人の姿・力量とチーム力の一端

☆ GOOD HABITの徹底 → 疲れていてもお箸は右手で持つ

##### ②組織として最大限の力を発揮するチームの完成図を描き、育成する力をつける

・チームの目標からの逆算

・何をチームのストロングポイントにしていくのか。

・リーダーの選出と育成 = リーダーシップよりもメンバーシップ

→個人の組み合わせから生まれる+αの力の把握力を最大限出させる心のキーを見つける

→組織は機械ではなく生もの? = おいしいタイミング

##### ③『 感じさせる指導・“待つ”我慢 』 の徹底

- ・自分の心の中の動き『感じる』ことから自分作りをしていくことを支援・応援する

☆ そのためには…

チームとしての最大の力を発揮できるチームの輪を見つけ組み合わせる

みんなに合わすことからではなく、個性が伸びた最大値をチーム力と考える

※目 → 感性

◇ストロング・ポイントの発見 <本人が勝負できる武器、自分をもっとも表現できるもの>

- ・試す勇気と人間的魅力からの発掘

- ・どこかにそのときに必要な選手の伸びるキーがある

→自分しか知らない自分? 誰も気づいていない自分?

※意識

選手や保護者、職場、地域から

子供達はそれぞれ一所懸命

→ ※だからこそどう伸ばすかが大切であり、使命である

※保護者は子供を支えてくださっている、一番の協力者でありサポートー

※職場や地域は活躍を期待し、協力してもらっている

☆あなたでなければ… と思われる指導者に

- ・自分を見つめる厳しい自分をもう一人作らなければならない
- ・結果を受け止める自分自身の器こそがチーム力につながる

結局は  
指導者自身の  
情熱と覚悟

あなたでなくてもいいんです… といわれたらどうしますか?

◇「 熱心なことは最低レベルである 」 伊吹高等学校 女子ホッケー部 部訓より 抜粋

### 伊吹高等学校 女子ホッケー部 部訓

- 一、目標のレベルがチームのレベルである
- 一、試合は参加することに意義はあるが勝たねば価値は少ない
- 一、言い訳は不要、勝つための努力が必要
- 一、熱心なことは最低レベルである
- 一、練習はできないところの繰り返しである
- 一、コートに入る怖さを知れ、人の悪口は言うな、やがては孤立する
- 一、コーチの指示に百分百であれ、九九%では勝負に勝てぬ
- 一、ミスは叱りエラーは慰めよ
- 一、常に有言実行であれ

真心で為せば成る、人に優しく自分に厳しく

指導歴 インターハイ 優勝4回・準優勝1回、全国選抜大会 優勝1回・準優勝1回

北京オリンピック日本代表コーチ(2005~2008)、U18日本代表コーチ(2005~)